

ダイコティック・リスニングの『注意法』について

* 東京都神経科学総合研究所

** 上智大学

*** 東京都立府中療育センター

杉下守弘* 山崎久美子** 川崎葉子***

目的

自閉症の原因についてはいろいろな説があるが、その一つに大脳半球機能分化の遅れが原因であるとする説がある。この説を検討するため、自閉症児の言語半球が一方の大脳半球にどの位偏在しているかを検討した。

方法

方法としては、ダイコティック・リスニング検査を適用した。この方法は、左右大脳半球のいずれが言語半球であるかについて、かなりの程度、判定ができると言われている方法である。ダイコティック・リスニング検査は、両耳から同時に異なる音を呈示し、どのような音が聞こえたかを答えさせる検査である。

しかし、この方法には2つの欠点がある。第1は、注意を一方の耳の音にのみ向けるなど、注意に関する問題があることである。第2は、答える時に、どちらの耳の音から答えるかで結果が左右されるという点である。

我々はこのような欠点を除くため、Brydenら¹⁾(1983)によって行なわれた『注意法』を用いた。『注意法』とは、ダイコティック・リスニングの際に、一方の耳からの刺激にのみ注意を向けさせる方法である。左耳の音に注意を向ける場合と、右耳の音に注意を向ける場合を行なうわけである。ダイコティック・リスニングにおける刺激は「バ」「タ」「カ」「パ」「ダ」「ガ」の6つの破裂音であり、Springer(1975)²⁾によって用いられたものと同じである。

結果と考察

1. 『注意法』の妥当性を検討するためにいずれも

右利きで、家族にも左利きがない正常者、男12名、女12名の計24名に従来の施行法と『注意法』を試み、その結果を比較した。

従来の方法では、右耳の成績が79%、左耳の成績が70%という結果であった。一方、『注意法』では、右耳の成績が77%、左耳の成績が68%であった。両者の方法では差がなかった。詳しく述べると、従来の方法では、男性の場合、右耳の成績が75%、左耳の成績が67%であり、女性の場合、右耳の成績が84%、左耳の成績が72%であった。一方、『注意法』では、男性の場合、右耳の成績が70%、左耳の成績が61%であり、女性の場合、右耳の成績が84%、左耳の成績が74%という結果であった。

2. 大脳損傷例に従来の方法を行なうと、すでに述べたように、一方の耳からの音を先に答えるという欠点を呈することがある。また、一方の耳の成績が他方の耳の成績より低下していることに気づき、成績の悪い方の耳に注意を向ける例がみられた。また、2つ聞かせているのに常に1つしか答えないうために両耳の正答率が著しく低下してしまう例もみられた。『注意法』では教示が守りやすいので、検査を行ないやすいことが明らかとなった。

自閉症児は周知のごとく、検査を行ないにくい対象である。従って、従来の方法よりも『注意法』が適当と考えられた。

3. 自閉症児3名に予備的に検査した結果は次の通りである。

症例1. T.K. 14才、男、右利き、一卵性双生児の兄。言語症状の特徴として、ダットサンなどの車の名前をすぐ言う傾向がある。ダイコティック・リスニング検査を行なうと右耳の正答率58%、左耳の正答率20%であった。ラテラルティ・インデックスは0.49、λ値は1.72であった。

症例 2. H.I. 12才、男、右利き。言語を介したコミュニケーションはある程度可能である。ダイコティック・リスニング検査を行なうと、右耳の正答率28%、左耳の正答率25%であった。ラテラリティ・インデックスは0.06、λ値は0.17であった。

症例 3. D.M. 11才、男、右利き。言語症状の特徴は反響言語が活発なことである。ダイコティック・リスニング検査を行なうと、右耳の正答率22%、左耳の正答率22%であった。ラテラリティ・インデックスは0、λ値は0であった。

以上のごとく、自閉症児3例にダイコティック・リスニング検査を予備的に行なってみた結果、自閉症児では、成績が両耳共に低いことが明らかになった。これは、より易しい課題を行なう必要があることを示唆している。本研究では音刺激として、破裂音「パ」「タ」「カ」「バ」「ダ」「ガ」を用いたが、数字1～9を用いて行なえば、課題がより簡単になるので、数字を音刺激として用いることを今後検討したいと思う。

ところで、自閉症児にしばしば反響言語が認めら

れる。ダイコティック・リスニング検査は、聞こえた音を復唱するテストであるので、反響言語のある症例はテストを施行しやすいことが考えられる。ただ一例の経験であるが、そのような可能性はないようであった。

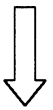
今後、多くの自閉症児に『注意法』によるダイコティック・リスニング検査を行ない、自閉症児の言語半球に関して結論に達したいと思う。また、方法については、さらに改良を加え、自閉症児に適用し易い形にしていきたい。

文 献

1. Bryden, M.P., Munhall, K., & Allard, F. : Attentional Biases and the Right-Ear Effect in Dichotic Listening. *Brain & Language*, 18, 236-248. 1983.
2. Springer, S.P. et al. : Dichotic testing of partial and complete split brain subjects. *Neuropsychologia*, 13, 347-352. 1975.



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



目的

自閉症の原因についてはいろいろな説があるが、その一つに大脳半球機能分化の遅れが原因であるとする説がある。この説を検討するため、自閉症児の言語半球が一方の大脳半球にどの位偏在しているかを検討した。